



特 217

827

音 福 の 陀 佛

著 里 篤 林 小



始



特217
827



佛
陀
の
福
音

小林鶯里著

東京出版通信社發行



序

釋尊實紀三十五歳の時、波羅奈斯の地に於て獨遊行し、佛陀迦耶に達し、畢波羅樹の樹下なる金剛座に、淨軟の草を敷きて結跏趺座し給ひ、「我一切種智を得ずんば此座を立たじ」と誓はれ、過去を想ひ、未來を思念し、人生を觀じ、道法を察し、あらゆる經驗と知識とを綜合して解脱の大眞理を證見し給はんとせられた。既にして中夜、初更を過ぐる頃、大智眼を以て三界十方の無量世界を觀じ。二更にして神通眼を以て三世の實相を觀すること掌中を見るが如く、第三更に因果を洞觀し。第四更、明星出づるの時を以て一切種智を得給ひ、三界は是我有なり、其の中の衆生は皆我子なりと覺知せられ、此に無上菩提を成じて三界の大導師となり給ふたのである、これ實に二月八

日の拂曉であつて、此時三千大千世界の光明は佛身を照し、六金色の光輝は十方に輝き、梵天は蓮華を散じて供養し、「佛は無上正覺を成じ給へり、諸々の有情の爲めに不死の門は今開かれたり」と歎せられ、爾來四十五年の間、雄辯滔々、横説堅説、隨機開導、殆んど寧日なく、賢愚貴賤老幼の差なく、佛の教化に値ひまつりたる者、等しく大益を蒙らぬものはない。而も釋尊圓寂せられた後も、其の説かれたる貴教は、七千餘卷の經典となり、三千年間東洋五億萬人の信仰と、思想と、習慣とを支配し、油然として文明の源泉を爲した。本書は重に佛陀の金口より出でたる經文を摘録し、佛敎の廣大なるを知らしめ、吾人日常の修養に資せんと試みたのである。

鶯 里 山 人

佛 陀 の 福 音

小 林 鶯 里 編

【一】昔一の蛇あり、頭と尾と互に其勝れるを諍ふ、頭曰く、我に耳ありて能く聞き、目ありて能く視、口ありて能く食ひ、行くとときは必ず我前にあり、此故に我勝れり、汝は總て此事なし。汝何んぞ我に勝らんや、尾曰く、我汝をして行かしむるを以て汝行くことを得るなり、我若し汝を行かしめずんば云何んと、則ち身を樹に繞らすこと三匝し、三日を経て猶放たず、頭去りて、食を求めんと欲するも得ず、飢て死せんとして尾に告げて曰く、汝我に勝れり、故に身を放てよ、尾則ち之を放つ、頭復曰く、汝既に勝れり、我に前ちて進むべしと、尾喜びて先づ進み須臾にして

火坑くわうこうに隨おちて死しせり。佛給ぶつたまはく此これは是衆生これしじやうの無智むちにして、人我ひとわれを執しよし互たがひに瞋あはり諍あそひて共に三塗さんずに沈しづむに譬たとへたり。(雜譬喻經)

【二】世人愚惑せじんぐわくにして五欲ごよくに貪著とんちやくし死しに至いたるまで捨すてず、之これが爲ために後世のちのよに無量むりやうの苦くを受うく、譬たとへば愚人ぐじんの好果よくくだものに貪著とんちやくして樹きに上のぼりて之これを食くらひ下くだることを肯がへんせず、人其樹そのきを代かるに樹傾きかたむきて乃すなはち墮おち身首みかしら壞くたけて苦痛くつうして死しするが如ごとし、得うる時は樂らく少すくく失うしなふ時は苦く多おほし、蜜みつを刀かたなに塗ぬるに舐なむる者もの甜あまきを食たりて舌したを傷やぶるを知らず、後大のちにおほなる苦くを受うくるが如ごとし。(智度論)

【三】水みづは善よく影かげを現うつすも若もし釜かまに入れて猛火もうくわを加くわふれば、釜水ふすゐ踊躍ゆうやくせん、又更またさらに布ぬのを以もつて上うへを覆おほへば衆生しじやう照臨しやうりんするに亦また其影そのかげを視みる者もの無なし、心中しんちゆうに本三毒もとさんどくあり、涌沸ゆうふつして内うちに在あり、貪欲どんよく、瞋恚しんい、睡眠すゐみん、掉舉しやうこ、疑等ぎとうの五蓋外ごがいほかを覆おほふ、終つひに道みちを見みず。

(四十二章經)

【四】我淨われきよければ施度ほどこしも亦淨またきよし、施度淨ほどこしきよきが故ゆゑに願ぐらんも亦淨またきよし、願淨ぐらんきよきが故ゆゑに菩提ぼだいも亦淨またきよし、菩提淨ぼだいきよきが故ゆゑに一切いっさいの法ほふも亦淨またきよきなり。(大集經)

【五】我一切われいっさいの衆生しじやうを觀みるに衆生しじやう皆貪欲みなけさほり愚痴ぐち等らうの煩惱ぼんノウの中に佛ぶつの智ちと佛ぶつの眼かと佛ぶつの身みとを具そなへて儼然げんぜんとして動うごかず。善男子ぜんなんしよ一切いっさいの衆生しじやうは煩惱ぼんノウの中にありても常に染汚せんごれざる如來藏にらいざうあり。徳相とくさう備足びそくりて我われと異なることなし、譬たとへば眞金ごがねの不淨ふじやうの中に墮おちて隱没かくれて現あらはす、年としを歴かるも眞金ごがねの質しつは壞やぶれず、而しかも知るものなし、唯天たいてん眼げんあるものは能よく眞金ごがねあることを知るが如ごとし。

【六】一切衆生いっさいしじやうの心性しんしやうは本淨もときよし、煩惱ぼんノウの諸結染しよけつせん着ちやくること能あたはず、猶なほ虚空こくうの玷汚けがすべからざるが如ごとし。(大集經)

【七】佛ぶつは地天ぢてん大王だいわうに告つげての給たまはく、一切いっさいの諸法しよほふは皆みなな是これ佛法ぶつほふなり。大王だいわうは佛ぶつに問とふて曰いはく、世尊せそん若もし一切いっさいの法ほふは皆みなな佛法ぶつほふなれば一切いっさいの衆生しじやうも又また佛法ぶつほふなるべし、佛ぶつ答こたへ給たまはく、若もし顛倒てんたうの想おもひを以もつてせずんば一切いっさいの衆生しじやうは皆みなな是これ佛法ぶつほふなり、大王だいわうよ實じつの如ごとく衆生しじやうを見みれば是これ平等びやうとうの眞如しんによは實際じつさいなり。實際じつさいは法界ほふかいなり。法界ほふかいは顯示けんじす

る能はず、假に實際と名く、故に俗なり、故に言説あり。(寶積經)

【八】一切の障礙は即ち究竟の覺なり、得も失も解脱にあらざる事なく、成も壞も涅槃にあらざる事なく、智も愚も般若にあらざることなく、菩薩と外道の成就せし法は同じく是れ菩提なり。無明も真如も異の境界なし、戒定慧の三學も貪、瞋、痴の三毒と共に之れ梵行なり、衆生の國土も同一法性なり、地獄と天堂と共に淨土なり、有性も無性も共に佛道を成じ一切の煩惱は畢竟して解脱なり、無上の妙覺は十方に遍くして如來を出生し一切の法と同體平等なり。(圓覺經)

【九】佛思益に告げ給はく、我生死を得ず涅槃を得ずと、時に五百の比丘は座より起ちて曰く、我等空しく梵行を修めぬ、涅槃なくんば何んぞ、道を修め智慧を求めんや、思益は比丘に告て言く、譬へば癡人の虚空を畏れて空を捨て、走るに到る處皆虚空なるが如し。又一入ありて虚空を求めて東西に馳走せて曰く、吾虚空を求むと是人虚空の名を知りて虚空を知らざるなり。涅槃を求むるものも涅槃の中を往來し

て而も涅槃を知らず。是れを煩惱として見るのみ、涅槃の名字を知りて涅槃の體を知らざるなり。(梵天思益所問經)

【一〇】佛大衆に告げ給はく、涅槃とは解脱なり、涅槃は色にあらすとは二乗の解脱なり、色なりとは諸佛の解脱なり、解脱は一切の繫縛を遠離るといふときは生あるなく和合あるなし、此れ眞の解脱にあらす、眞の解脱は即ち是れ如來にして、其性清淨なり、如來と解脱と二あることなし。眞の解脱は虚空なり、眞の解脱は無爲なり、眞の解脱は無病なり、眞の解脱は安靜なり、眞の解脱は安穩なり、眞の解脱は等侶なし、眞の解脱は憂畏なし、眞の解脱は憂喜なし、眞の解脱は蕪破なし、眞の解脱は迫切なし、眞の解脱は動法なし、眞の解脱は希有なり、眞の解脱は量るべからす、眞の解脱は最上なり、眞の解脱は無上なり、眞の解脱は恒なり、眞の解脱は賢實なり、眞の解脱は無邊なり、眞の解脱は甚深なり、眞の解脱は見るべからす、眞の解脱は取るべからす、眞の解脱は清淨なり、眞の解脱は一味なり、眞の解脱は

寂靜なり、眞の解脱は平等なり、眞の解脱は知足なり、眞の解脱は默然なり。

(涅槃經)

【一一】 諸佛世尊には比なき不思議の境界あり、所謂一切の諸佛は一處に跏趺し給ひて遍く十方無量の世界に滿ち給へり、一切諸佛は一義句を説て悉く能く一切の佛法を示し給へり、一切諸佛は一光明を放ちて悉く能く一切の世界を遍照し給へり、一切諸佛一身中に於て悉く能く一切諸身を示現し給へり、一切諸佛は一處中に於て悉く能く一切世界を示現し給へり、一切諸佛は一智中に於て悉く能く一切諸佛を決了し給へり、一切諸佛は一念中に於て悉く能く十方世界に往き給へり、一切諸佛は一念中に於て悉く能く如來の無量の威徳を現し給へり、一切諸佛は一念中に於て普く三世佛及び衆生を緣じ給ひて心雜亂せず、一切諸佛は一念中に於て去來今の一切の諸佛と體一にして二なきものなり。(華嚴經)

【一二】 佛思益に告げ給はく、思益よ若し能く佛の五力を以て法を説くことを知る

ものは能く佛事を作すと爲す、思益曰く、世尊佛の用ひ給へる五力とは何等ぞや、佛彼れに告げ給はく、思益よ佛所用る五力とは、一には言説、二には隨宜、三には方便、四には法門、五には大悲なり。言説とは過去の法、未來の法及び現在の法を説き、世間出世間の法を説き、有罪無罪の法を説き、有漏無漏の法を説き、有爲無爲の法を説き、生死涅槃の法を説く、然るに諸法は説くべからず、而も是を説く、若しかくの如く知る時は一切の言説ありと雖、諸法に於て貪著せず、貪著なきが故に無礙辨才なり、諸の言説は法性を壞らす言説は法性にあらざるが故なり。次に隨宜とは垢法を淨法と説くことあり、淨法を垢法と説くことあり、語見を生ずものゝ爲めには實語も虚妄なりと説き、増上慢を生ずものゝ爲めには虚妄も實語なりと説く、顛倒の煩惱を滅すといふ邊よりは涅槃ありと説き、諸法は生ずる相なく又滅する相なき邊よりは涅槃なしと説く、世諦門よりは衆生ありと説き、第一義門よりは衆生なしと説くなり。次に方便とは佛は衆生の爲めに説けり。布施すれば大福を得

戒がいを持もてば天てんに生しやうずることを得え、忍辱にんじやくは端正たんせいなる果報くわほうを得え、精進しやうじんは諸しよの功德くどくを得え、禪定ぜんぢやうは法喜はふきを得え、智慧ちゐは諸しよの煩惱ぼんノウを捨すつことを得え、多く聞きけば智慧ちゐを増長ぞうぢやうし、十善じよぜんを行おこなへば人天にんてんの福ふくを得え、慈悲喜捨じひきしやは梵天ぼんてんに生うまゝるゝことを得え、禪定ぜんぢやうは如實じよじつの智慧ちゐを得え、智慧ちゐは道果だうくわを得え、學地がくぢは無學地むがくぢを得え、佛地ぶつぢは無量むりやうの智慧ちゐを得え、涅槃ねはんは一切いっさいの煩惱ぼんノウを滅めつす。然しかるに如來にょらいは我相がそうもなく、人相にんそうもなく、衆生しゆじやうもなく、壽命相じゆみやうもなく、亦また施しと慳おしみとなく、持戒ぢがいと破戒はがいとなく、忍辱にんじやくと瞋恚しんくいとなく、精進しやうじんと懈怠じたいとなく、禪定ぜんぢやうと亂心らんしんとなく、智慧ちゐと智慧果ちゐくわとなく、一切いっさいの相さうなることなし。而しかも此これを説とく皆衆生みなしゆじやうの爲ためめに方便ほうべんとして説とくなり。次に法門はうもんとは眼げん、耳に、鼻び、舌ぜつ、身しん、意いの六根ろくこんも色しき、聲しやう、香かう、味み、觸そく、法はふの六境ろくきやうも皆是みなこれ解脫げだつの門もんなり、何なんとなれば、六根ろくこんも六境ろくきやうも其實そのじつは空くうなり、我がもなく我の所しよもなし、空くうなり無想むさうなり、無作むさなり生しやうもなきなり、滅めつもなきなり、來きたる所ところもなきなり、去さる所ところもなきなり、退しりぞくこともなきなり、起おこることもなきなり、法性はふしやうは清淨しやうじやうなり、我われは文字もんじを以もつて此これを示しめす。次に大悲だいひとは佛ぶつは三十二

によると藝術衝動げいじゆつせうどうといふものは、最も生活せいかつに必要な、又生活せいかつに密接みつせつな衝動せうどうから生うれたものであるといふことになつてゐる。

そこで文學ぶんがくの發生はつせいを見るに、文學ぶんがくとても、他の裝飾さうじやくとか、彫刻てうこくとか、繪畫えいざとかと同じやうに、實際じつさいの人生じんせいの上に必要ひつやうな動機どうきから生うれたものであることは言いふ迄までもない。これを一般的はんていにいふならば、人間にんげんに言語げんごがあつたときから詩しは存在せんざいしたものであるといふことが出来る。といふのは、文字もんじのない所に文學ぶんがくは存在せんざいし得えないことからも知しることが出来る。それに文字もんじといふものは相當きやうたうに人智じんちの進すすんでから生うれるものであるから、この文字もんじと同時に詩しが存在せんざいしたといふことは肯うべである。それでは我が國わがくにの文字もんじはいつの時代じだいから創出そうしゆつせられたか。これに就つても種々しゆしゆの説せつがあつて、はつきりしてはゐない、が併しかし一般はんには應神天皇おうじんてんわうの御代みよに漢字かんじが渡來たうらいしてそれから邦人ほうじんは文字もんじを知しつたといはれてゐる。併しかし文字もんじのない時に文學ぶんがくは存在せんざいしないとはいふものゝ、わが國わがくにの例れいに照てらして見みれば、文字もんじの生うまれる以前いぜんから文學ぶんがくのあつ

而も垢に著す、此に於て大悲を起し、十四には一切の法は染を離る、而も染ありとす、此に於て大悲を起し、十五には一切の法は瞋を離る、而も瞋ありとす、此に於て大悲を起し、十六には一切の法は癡を離る、而も癡ありとなす、此に於て大悲を起し、十七には一切の法は來る所なし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、十八には一切の法は去る所なし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、十九には一切の法は起ることなし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、二十には一切の法は戲論なし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、二十一には一切の法は相なし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、二十二には一切の法は作ることなし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起し、二十三には世間は常に瞋恚を起して諍ふ、此に於て大悲を起し、二十四には世間は邪見顛倒の念を起して邪なる行を爲す、此に於て大悲を起し、二十五には世間は饕餮して厭き足ることなく互に掠奪へり、此に於て大悲を起し、二十六には衆生は産業妻子等に堅く執着の念を作す、此に於て大悲

を起し、二十七には衆生は身に貪著す、此に於て大悲を起し、二十八には衆生は欺誑を好みて邪命を行ふ、此に於て大悲を起し、二十九には衆生は不淨の家を樂む、此に於て大悲を起し、三十には衆生は聖解脱の行を懈怠る、此に於て大悲を起し、三十一には衆生は最上の智慧を捨て、聲聞辟支を求む、此に於て大悲を起し、三十二には一切の法は滅することなし、而も有りと信ず、此に於て大悲を起す、若し菩薩ありて此大悲心を起せば大福田なり。(梵天思益所問經)

【一三】 如來の心意識は測り難し、譬へば虚空の如く一切の依る所となる、又如來の智は世間出世間の智の依る所となる、譬へば淨き法界の如く常に一切の聲聞、緣覺菩薩の解脱の依止る所となる、譬へば大海の水四天下の地に潜潤して流るゝが如く如來の智は清淨明了平等無二にして分別ある事なし、但衆生の心行の異なるに隨て得る所の智慧各同じからざるのみ。(華嚴經)

【一四】 譬へば人に七子ありて、其中に一子病に遇ふときは父母の愛は平等ならざ

るにあらすと雖、然も病子に於て心偏へに重きが如く如來も亦諸の衆生に於て平等ならざるにあらざれども、然も罪ある者に於て心偏へに重し。(涅槃經)

【一五】一切諸法の起滅を了知し修すべきは、已に修し、斷すべきは悉く斷じ給へるを以て佛と名け奉る。佛の世に在すや蓮花の泥の中に生じて、更に泥の著かざるが如く、世にありて、世に著され給はず、一切の煩惱を破りて究竟して生死の際を離れ給ふを以て佛と名け奉る。(雜阿含經)

【一六】今此三界は皆是れ我有なり、其中の衆生は實に是れ吾子なり、而して今此處は諸の患難多し、唯我一人能く爲に救護す。(法華經)

【一七】佛阿難に告げ給はく、それ衆生の極樂國に生ずるものは皆悉く正定の聚に入る、其故は無量壽佛の國には邪の聚及び不定の聚なきを以てなり、其の數恒河の砂の如き十方の多くの諸佛如來は皆共に無量壽佛の威徳の不可思議なるを讚歎し給へり。

諸有衆生其名號を聞きて信心歡喜し、乃至一たび佛を念ずるも至心に回向して彼國に生れ人と願すれば、即ち往生を得て不退の位に住するを得べし。(無量壽經)

【一八】佛、目連に告げ給はく、譬へば萬川の流水に浮草ありて、前は後を顧みず、後は前を顧みず、都て大海に會するが如く世間の人も亦然なり、豪貴、富樂、自在なることありと雖、悉く生老病死を免かるゝを得ず、只佛經を信せざるによりて後世に人となりて、更に甚しく困厄して、諸佛の國に生ずる事能はず、是の故に我説く無量壽佛の國は往き易く取り易し、而も人修行して往生すること能はず、反て九十五種の邪道に事ふ故に、我是人を稱して、眼なき人と名け、耳無き人と名く。(目連所問經)

【一九】上品の十善を智慧を以て修行す。然れども心狹劣にして三界を怖れ大悲心を闕く、他の説法の聲を聞きて解得するが故に聲聞乘と云ふ。(華嚴經)

【二〇】親交婆羅門、橋戸迦に語りて言く、佛の一切法を説き給ふ中に悉く我ある

ことなきや、憍尸迦答へて言く、我佛法を見るに生死際りなし、一切無我の故に若
人我を計すれば遂に解脱の道を得ること能はず、若し無我を知らば貪欲なくして便
ち解脱を得ん、時に親交、憍尸迦に語りて曰く、縛有りて則ち解有るなり、汝無我
を説かば縛あらず、若縛あらずんば誰か解脱を得ん、憍尸迦曰く、無我なりと雖
而も縛を解くこと有り、何となれば煩惱覆ふが故に縛せらる、煩惱を斷すれば則ち
解脱を得るが故なり。(大莊嚴經)

【二一】 若し人唯止を修すれば、則ち心沈没し、或は懈怠を起して衆善を樂はず、
大悲を遠離す、是故に觀を修す、觀を修習ふ者は當に一切世間の有爲の法久しく停
るを得ることなく、須臾に變壞し一切の心行は念々に生滅するを以ての故に苦なり
と觀すべし、應に過去所念の諸法は恍忽として夢の如しと觀すべし。應に現在所念
の諸法は猶電光の如しと觀すべし。應に未來所念の諸法は猶雲の歟爾として起るが
如しと觀すべし。應に世間一切の有身は悉皆不淨にして一として樂むべきものな

しと觀すべし。是の如く當に念すべし、一切の衆生は無始の時より己來無明の薰習
せるに因るが故に心をして生滅せしむ、已に一切の身心の大苦を受け現在に即ち無
量の逼迫あり、未來の所苦亦分齊なし捨て難く離れ難くして覺知せず、衆生は是の
如く甚だ惑む可しと爲す、此の思惟を作して即ち應に勇猛に大誓願を立つべし。願
はくば我心をして分別を離れしむるが爲に十方に編して一切の諸善功德を修行し、
其未來を盡くし無量の方便を以て一切の苦惱の衆生を救拔し涅槃第一義の樂を得せ
しめんと。是の如きの願を起すを以ての故に一切の時、一切の處に於て己が堪能
に隨て所有衆善を修學するを捨てず、心に懈怠なく、唯座する時、止を專念するを
除く、若し餘の一切に於ては悉く當に應作と、不應作とを觀すべし。
若し行、若し住、若し座、若し臥、若し起、皆應に止觀俱行すべし。所謂諸法の
自性不生なるを念すと雖も、復即ち因縁和合せる善惡の業、苦樂等の報は失せず壞
れずと念す、因縁善惡の業報を念すと雖も、亦性不可得なりと念す、若止を修すれ

ば凡夫の世間に住著するを對治し、能く二乗の怯弱の見を捨つ、若觀を修すれば二乗の大悲を起さざる陋劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離す、是義を以ての故に是止觀、二門共に相成じ相舍離せず、若止觀具せざれば、則ち能く菩提の道に入るることなし。(起信論)

【二三】 佛言く、比丘よ覺れるものは實の如く苦を知り。實の如く苦の集を知り。實の如く苦の滅を知り、實の如く苦を滅するの道を知るなり。實の如く苦を知るとは、謂く、生苦、老苦、病苦、死苦、怨憎、會苦、愛別、離苦所、求不得苦、五陰盛苦を知るなり。實の如く苦の集を知るとは、謂く、現在の愛著の心は未來の身と欲とを受け、その身と欲との爲に更に種々の苦果を求むるなりと知るなり。實の如く苦の滅を知るとは、謂く、愛と欲と種々の苦果とを斷じて餘り無からしめ、生死の本を斷滅止没するなり。實の如く苦を滅するの道を知るとは、謂く、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道を知るなり。比丘よ當に

實の如く苦を知るべく、當に苦の集を斷すべく、當に苦の滅を知りて證を作すべく又當に苦滅の道なる八正道を修すべし。(中阿含經)

【二三】 八正道とは、一に正見、二に正思惟、三に正語、四に正業、五に正命、六に正精進、七に正念、八に正定なり、正見とは布施を爲し、沙門道人を禮し、佛を供養し及び父母に孝順なるが如き一切の善法は後世に福を得べきことを信するを云ふ、正思惟とは道を念じて瞋らず、忍辱を守りて相侵さざるを云ふ、正語とは妄語綺語、惡口、兩舌の口の四過を犯さざるを云ふ、正業とは盜まず、殺さず、淫せざるを云ふ、正命とは飲食、牀臥等に於て貪ることなく非法を離るゝを云ふ、正精進とは行精進なるを云ふ、正念とは意念妄ならざるを云ふ、正定とは意を止め意を護りて犯すことなからしむるを云ふ。(八正道經)

【二四】 戒と定と慧とを解脱の道と云ふ、戒とは威儀の義なり、定とは亂れざるの義なり、慧とは知り覺るの義なり、解脱は束縛を離るゝの義なり、又戒は惡業の垢

を除き、定は纏縛の垢を除き、慧は見使の垢を除く、又三種の善に別ては戒を初善となし、定を中善となし、慧を後善と爲す、何故に戒を初善と爲すや精進に戒を持てる人は退くことなし、退かざるを以ての故に喜ぶ、喜ぶを以ての故に樂む、樂むを以ての故に心定まる、之を初善と云ふなり、定を中善となすは定を以て一切を實の如く知見するが故なり、慧を後善と爲すは既に實の如く知見するが故に迷はず、迷はざるを以ての故に欲を離る、欲を離るゝを以ての故に解脱す。(解脱道論)

【二五】 戒は是れ一切善法の梯磴なり、亦是れ一切善法の根本なり、地の悉く是れ一切樹木の所生の本なるが如し。(涅槃經)

【二六】 戒は是正順解脱の本なり、故に解脱戒本と名く、此戒に依るときは諸の禪定及び苦を滅するの智慧を得、是故に比丘よ當に淨戒を持して缺くこと勿れ、若人能く淨戒を持てば則ち善法を得、若淨戒なくんば諸善功德皆生することを得ず是故に當に知るべし、戒を第一安穩功德の在る所となすことを。(遺教經)

【二七】 五戒とは、一には生けるものを殺さず、二には與へざるものは取らず、三には他の女を淫せず、四には妄りを語らず、五には酒を飲まず、人若し常に五戒を持てば人天の果を得べし。(中阿含經)

【二八】 八戒とは、一には生けるものを殺さず、二には與へざるものは取らず、三には他の女を淫せず、四には妄りを語らず、五には酒を飲まず、六には食物を過さず、七には高く廣き牀に座せず、八には妓樂を作し、又は香華を身に塗らず、之を比丘の賢聖八關齋法と名くるなり。(增一阿含經)

【二九】 十善戒とは、身に殺と盜と邪淫とを爲さず、口に妄語と兩舌と惡口と綺語とを爲さず、意に貪欲と瞋恚と邪見とを起さざるなり。(海龍王經)

【三〇】 十重禁戒とは、一には生けるものを殺すを快よしとする勿れ、二には人の物を劫し盜むこと勿れ、三には婦女と淫行を爲すこと勿れ、四には故らに妄りを語ること勿れ、五には酒を賣り買ひすること勿れ、六には自を讚めて他を毀ること勿

れ、七には法を求めらるゝも惜んで説かず却て之を毀る如きことを爲す勿れ、八には他の過失を談ること勿れ、九には諫を受けて却て之を瞋り自ら悔ひざるが如きことを爲す勿れ、十には三寶を誹謗すること勿れ、比丘此十戒を犯すものは極重罪を受くべし。(梵網經)

【三二】 人、一握の食を施すも、能く解脱分の善根を種うることを得るものあり、五年一度の大施會を作すも解脱分の善根を種うることも能はざるものあり、或は一日の齋戒を持ちて能く解脱分の善根を種うることもあり、身を終る迄戒を持つも解脱分の善根を種へざることあり、或は一偈を誦するも能く解脱分の善根を種うることもあり、善く三藏の文義に通ずるも解脱分の善根を種へざることあり、其故如何とならば、若此事を以て勇猛解脱涅槃に回向せば永く生死を離る、若是の如く回向せずんば終身戒を持ち學を修むるもの解脱すること能はざるなり。(婆娑論)

【三三】 一切の衆生は無始より以來種々の顛倒をなし、妄に四大を認めて身相とな

し、六塵の縁影を自心の相とし彼の病める眼の空中の華と第二の月とを見るが如し空には實に華あることなし病めるもの、妄執なり、故に生死に輪轉す之を無明といふ。(圓覺經)

【三三】 摩訶陀國の王佛に問ひ奉りて言く、世尊一切の衆生は何に因りて業を造るや、佛王に告げ給はく、王よ一切の衆生は我見によりて顛倒の分別をなす、顛倒の分別は惑なり、惑へるが故に業を造る、業を造るが故に解脱すること能はざるなり。國王は又問ひ奉りて言く、世尊我見は何によりて起るや、佛王に答へ給はく、王よ我見は無明を根本となすなり。王更に問ふ、世尊無明は何を根本となすや、佛彼に答へ給はく、王よ無明は理に違へる作意を根本となすなり。王は更に問ふ、世尊理に違へる作意は何を根本となすや、佛彼に答へ給はく、王よ理に違へる作意は平等の心を根本となすなり。王更に問ひ、世尊平等の心とは何ぞや、佛彼に答へ給はく、王よ不平等の心とは無始より以來實の如く知らざるを不平等の心といふなり。

王は更に問ふ、世尊無始より以來實の如く知らざるとは何ぞや、佛王に答へ給はく、王よ無始より以來實の如く知らざるとは無きものを有と計する等なり、若し一切の法に於て塵を離れ見を離るゝ語は眞實の語なり、故に説くべからざる眞實に於て語をなすなり。(法集經)

【三四】 若し善業なれば自然の力の故に好業報を受く、國王黨援の力と雖も業力には如かず。(大莊嚴經論)

【三五】 人の作すところの善悪は之れを知る者四あり、一には天之を知り、二には地之れを知り、三には傍人之れを知り、四には吾意之れを爲る。(罵意經)

【三六】 善人は善を行ひて樂より樂に入り、明より明に入る、悪人は悪を行ひて苦より苦に入り、冥より冥に入る。(無量壽經)

【三七】 父不善を作すとも子代りて受けず、子不善を作すとも父また受けず、善あれば自ら福を獲、悪あれば自ら殃を受く。(泥洹經)

【三八】 人は世間愛欲の中に在りて、獨り生じ、獨り死し、獨り去り、獨り來る當に行きて苦樂の地に至り趣くべし、身自ら之に當り代る者あることなし。(無量壽經)

【三九】 佛諸の比丘に告げ給はく、大地悉く變じて大海となる、その時一の盲の龜あり、其壽無量にして百年に一度び其頭を出すとせよ、又その海中に唯一の孔ある浮木ありて、海濱に漂流し風に隨て、東し又西すとせよ、今此盲龜頭を上ぐるの時此木の孔に遇ふことを得べきや否や、阿難佛に白して言く、世尊彼遇ふこと能はず、その所以は盲の龜若し海の東に至るも、浮木は風に隨て或は西に或は南北に、或は四維に繞りて必ず遇ふことを得べからざるが故なり、佛阿難に告げ給はく、此盲龜と浮木は互に往て違ふと雖も或は復相得ることあらん、然るに愚痴の凡夫に至りては五趣に漂流して復人の身を得んこと彼の龜よりも難し、此故に汝等よ今當に勤めて方便して増上の欲を起し教を學ぶべし。(雜阿含經)

【四〇】 心と心の所有とは本性は空寂なり、見るべからず聞くべからず心は幻の

如し、只衆生の偏に計度するが故に想を發して苦又は樂を受く、心の用は流水の如く念々に生滅して暫くも住まらず、大風の如く一刹那の間に方所を變ず、燈燭の如く衆の縁の合する時に發る、電光の如く須臾も住まらず、猿猴の如く五欲の樹に遊ぶ、畫師の如く種々の色を畫く、僮僕の如く諸の煩惱に策役はる、盜賊の如く功德を竊む、群猪の如く雜穢きを樂む、蜜蜂の如く味ある所に集る、然も本性は來るにあらず去るにあらず、即ち無爲に異ならず、本性は大の相なく、小の相なし、苦しみもなく、樂しみもなく、上中の差別もなし、常に住して變らず最も勝れたりとす。(心地觀經)

【四一】昔長者子あり新に婦を迎へて甚相敬愛せり、夫婦に語て曰く、卿厨中に入りて酒を取り來れ共に之を飲まんと、婦往て瓮を開くに、自の身影此瓮中に在るを見、更に女人ありと謂ひて大に悲り還りて夫に語て曰く、汝婦を瓮中に藏し復我を迎ふと、夫自ら厨に入り之を視るに又自ら身影を見しかば逆に其婦を悲て曰く、

卿男子を藏せり二人更に相忿恚り、各自實と呼ぶ、須臾にして道人の來るあり闢の由る所を聞き往て之を視、其影なることを知り、謂然として嘆じて曰く、世人愚惑にして空を以て實となす、今汝等の爲に瓮中より人を出すべしとて、一大石を取り瓮を打壞ては酒盡きて人遂に有ることなし、是に於てか二人其影なるを解り各慚愧を懷く、比丘爲に法要を説きて道を得せしめたりと、佛以て譬喩と爲し給ふ、影を見て闢ふとは三界の人五陰四大の苦空なるを知らざるが爲に生死絶へざるを諭し給ふなり。(雜譬喩經)

【四二】昔國王あり國を棄て、沙門と作り山中に於て精思す、草茅を屋と爲し、蓬蒿を席と爲して自ら志を得たりとし大笑して曰く、快哉と邊の道人問て曰く、今山中に獨座して道を學ぶ將た何の樂が有るやと、沙門言く、我王たりし時憂念る所多かりき、或は隣王の我國を奪はんことを恐れ、或は人の我財物を劫取らんことを恐れ、或は人の爲に貪利せらるゝを恐れ、又常に臣下の我財寶を利して反逆時無

きことを畏れたりしに、今や我れ沙門と作りて人の我を貪利する者なし、快言ふ可からず、是故に快と言ふのみと。(雜譬喻經)

【四三】昔三道人あり、共に相問て曰く、汝何に因て道を得たるやと。一人曰く、我王國の中に於て葡萄の大甚好なるを見しに哺時に人來て折取れるの後は悉く敗れ狼籍れて地に在り、我見て無常を覺り是に縁りて道を得たりと。一人曰く、我水邊に於て婦人の手を搖かし器を洗ふを見るに、臂環相叩き因縁合ふて乃ち聲を成す、我是に縁りて道を得たりと。一人曰く、我蓮華水邊に座して華の盛好を見しに、哺時數十の乗車ありて來る人馬中に浴し悉く華を散して走れり、萬物の常なきこと乃ち爾り、我是を覺りて道を得たりと。(雜譬喻經)

【四四】昔屠兒あり、千頭の牛を養ふて好く肥へ太らしめ、日に一牛を殺して肉を賣り已に五百牛を殺して餘り五百頭あり、方に共に跳騰喧戯て共に相舐觸す、世尊時に國に入り牛の此の如きを見感念て後を顧み諸の弟子に告げ給はく、此牛愚癡

にして伴侶盡き人と欲するも方に共に戯喧る人も亦是の如し、一日過ぎ去れば人命轉た滅す度世の道を思惟勤求めざるべからず。(阿育王譬喻經)

【四五】一切衆生世樂を貪著りて無常を慮はざるは之を警ふるに、人曠き野にて狂象に逐はれ怖れ走るとき一の空井の傍に樹根あるを見これによりて井中に潜む、然るに池の中に一大毒龍口を張りて上に向ひ、また四邊にも四の毒蛇ありて怖ろしさ云はん方なし、此人一心に樹根を捉ふと雖も更に黑白兩の鼠ありて其樹根を嚙む時に井上に一大樹ありて日に一滴づゝ蜜を滴して人の口中に入る、然る間此人たゞ蜜をのみ憶ひて復種々の衆苦を憶はず便ち此井中より出ることを欲せざるが如し。狂象とは世の常なきを云ひ、井とは衆生の宅を云ひ、毒蛇とは地獄を云ふ、又四毒蛇とは四大なり、樹根とは人の命なり、兩鼠とは晝と夜なり、人の命日に損滅じて暫くも往まらず、是故に行者當に無常を觀じて衆苦を離るべし。(譬喻經)

【四六】昔時四人の梵志ありて一所に集りて言けるやう、死の來るや豪族をも避け

す、されば我等今より隠藏れて死を避けんと、即ち一人の梵志は死を免れんとて高く空中に登りぬ、次に一人の梵志は死を免れんとて大海の中に入りぬ、次に一人の梵志は死を免れんとて須彌山の中に入りぬ、次に一人の梵志は死を免れんとて狼闍しき大市に至りぬ。然るに四人の梵志は皆命終りて死せりと、一切は無常なり、一切は苦なり、一切は無我なり、されば思惟して生老病死の愁憂と苦惱とを免れて涅槃の彼岸に到るべし。(出 曜 經)

【四七】 佛舎衛國に在やせし時、城中に婆羅門あり、年八十に向とす財富無數にして人と爲り、化し難く道徳を知らず、無常を計はず更に好舎を作る、前厦後堂涼臺温室東西の兩廡數十梁あり、但後堂の前の距陽未だ竣らず、時に婆羅門常に自ら經營て衆事を指揮せり、佛、道眼を以て此老公を見たまふに命日を終へず、當に後世に就くべきをば自ら知ること能はずして方に怱々しく勞作し精神に福なく甚憐愍むべし。佛阿難を將ひて其門に到り老公を慰問て言はく、勞倦なきや、今此舎

を作るは何の爲安ぞやと。老公言はく、前厦には客を待ち後堂には自ら處り東西の廡には當に兒息、財物、僕使を安くすべし。夏は涼臺に上り冬は温室に入らんと。佛老公に語げ給はく、我久しく汝が名を聞て相談講らんと思へり、佛に要偈ありて府亡に益あり、以て相贈らんと欲す願はくば少し事を廢て共に座して論説らんや否やと。老公答て言はく、今大に遠はしければ座して語るべからず、後日更に來て善く叙ぶべし、云ふ所の要偈は便ち之を聞く可しと。是に於て世尊即ち偈を説て言はく、子有り財有れども愚にして唯汲々たり我已に我に非ず、何ぞ子と財と有らん、暑には當に此に止まるべく、寒には當に此に止まるべしと、愚にして多く預め慮るも來變を知ること莫し、愚蒙愚蔽にして自ら我に智ありと謂ふ、愚にして而も智と稱す是を極愚と謂ふと。婆羅門の言はく、善く此偈を説けるも今實に追遠し後に來りて更に之を論せよと。是に於て世尊之を傷りて去り給ふ、老公後に自ら屋椽を授くるに椽墮て頭を打ち破り即時にして命過す、家室啼哭みて四隣を驚動す、佛去て未だ遠

からざるに便ち此變あり里頭に諸の梵志數十人佛と逢ひて何所より來り給ふぞと問ひ奉りければ、佛言はく、老公の舎に至り法を説きしかども佛語を信せず、無常を知らず今や忽然として已に後世に就きぬとて具さに諸の梵志の爲に更に前偈の義を説きたまへば、皆之を聞て欣然として道跡を得たり、是に於て世尊爲に偈を説きて曰く、

愚暗にして智に近くは瓢の味を斟むが如し、久しく狎習ふと雖猶法を知らず、開達して智に近くは舌の味を嘗むるが如し、須臾習ふと雖即ち道要を解る、愚人行を造て身の爲に禍を招く、快心にして惡を作り自ら重殃を致す行を爲すこと不善なれば退て悔恨を見、涕の面に流るゝを致さん、報は皆宿習に由ると、時に諸の梵志此偈を聞て益篤信を懷き禮を作して歡喜奉行けり。(法句喻經)

【四八】 水流れて常に満たず、火盛んにして久く燃へず、日出で、須臾に没す、月満ちて已に復缺けぬ、尊榮豪貴の者無常なること復是に過ぎたり。(罪業報應經)

【四九】 佛曰く、佛の出世は優曇華の如く、佛に値ふて信を生ずることは甚だ難し、涅槃に臨んで供養して檀度を具足することは倍難し、偈に曰く、

一切の諸の世間に於て、
生るゝ者は皆死に歸る、
要必らず盡くることあり、
夫れ盛なるものは必衰へ、
合會ものには別離あり、
壯年久しく停まらず、
盛なる色も病に侵さる、
衆くの苦輪は際なく、
流轉して休息ことなけん、
三界は皆無常にして、
諸有には樂あることなし。(涅槃經)

【五〇】 我、佛法の中には心を以て主と爲す、一切の諸法心に由らざるはなし。

【五一】 心は譬は工なる畫師の如し、能く諸の世間を畫き五蘊悉く生ず、若し人の心行の普く諸々の世間を造るを知らば是人は則ち佛を見、佛の眞實性を了したる

(心地觀經)

ものなり、何となれば心と佛及衆生とは此三差別なければなり、若し人三世一切の佛を了知せんと欲しなば應に斯くの如く觀すべし、心諸の如來を造ると。(華嚴經)
【五二】 不覺の義とは謂く、實の如くに眞如法の一なるを知らざるが故に不覺の心起るなり、而も其念ありて念に自想なく本覺を離れず、猶迷人の方に依るが故に迷ふも若し方を離れては則ち迷あること無きが如し、衆生も亦爾り覺に依るが故に迷ふ若し覺性を離れなば則ち不覺なし、不覺妄想心あるを以ての故に能く名義を知りて爲に眞覺を説けども、若し不覺の心を離れなば則ち眞覺の自相の説くべきものなし。

復次に不覺に依るが故に三種の相を生じ彼不覺と相應じて相離れず、何をか三と爲す一者無明業相とは不覺に依るが故に心動くをば名けて業を爲す、覺れば則ち動かすれば則ち苦あり果因を離れざるが故なり、二能見相とは動に依るを以ての故に能見あり動かざれば則ち見なし、三者境界相とは能見に依るを以ての故に境界妄

りに現す見を離れなば則ち境界なし、境界の縁あるを以ての故に復六種の相を生ず何をか六と爲す。一者智相とは境界に依りて心起り愛と不愛とを分別するを云ふ。二者相續相とは智に依るが故に其苦樂の覺を生じ心に念を起して相續して斷えざるを云ふ。三者執取相とは相續に依りて境界を縁念し苦樂を住持して心に著を起すを云ふ。四者計名字相とは妄執に依りて假名の言相を分別するを云ふ。五者起業相とは名字に依りて名を尋ねて取著し種々の業を造るを云ふ。六者業繋苦相とは業に依りて報を受け自在ならざるを云ふ當に知るべし。無明能く一切染法を生じ一切染法は皆是不覺の相なることを。(大乘起信論)

【五三】 心生滅とは、心來藏に依るが故に生滅の心あり、所謂不生不滅と生滅と和合して一に非ず、異に非ざるを名けて阿梨耶識と爲す。此識に二種の義あり、能く一切の法を攝め一切の法を生ず、何をか二と爲す。一者覺の義、二者不覺の義なり言ふ所の覺とは謂く、心體念を離る、念を離れたる相は虚空界に等しくして偏らざ

る所なし、法界一相即ち是れ如來の平等法身なり。(大乘起信論)

【五四】善男子等よ、菩薩は道に住して諸法の眞義を見る、眞とは實義なり、實義とは所謂虚空ならざるなり、即眞如なり眞如は自から内に證る所のものにして、文字の能く之を施設す所にあらず、何んとなれば眞如は一切の文字、言説及び戲論を超過えたるが故なり、諸の出入を離れ分別あることなく、相もなく一切の魔境及び一切の煩惱の境界を離れて其自性寂靜なり、故に垢もなく染もなく清淨微妙最上なり、常に住して動かす滅壞れず、若し諸の佛の世に出現するも出現せざるも此れは常住にして變らず、今菩薩は諸の善男子等を利益せんが爲に勇猛精進して此れを證るなり、此れを眞如と名け、實際と名け、一切智と名け、一切種智と名け、思ひ議るべからざるものと名く、故に我等が聞き或は思ふ所の智慧を以ては未だ能く證り得たりとなさす。譬へば人ありて極熱の季に曠野を行くに、彼れは東より西に赴き、此れは西より東に赴かんに、西より來れるものは渴に逼られて東より來れる人

に向ひて水なきかを問はん、東より來れる人はかく答へん、西より來れる人よ、此所を去ること遠からざる所に水あり、我れは此れを呑みて來れり、汝此より東に往かんに途の二に分れたる所あり、左の路を捨て、右に赴け青き山を見ん、彼の林の中に清淨なる冷たき水ありて能く渴を解かんと。今善男子等よ彼の熱と渴とに苦しめる人は水の名を聞きて其の渴を醫し能ふや否や、彼の渴きに苦しめる人は内に清淨なる水を得て、然る後に其の熱と渴きとの患を除かん、かくの如く聞くと思ふとのみにては眞如を得たるにあらず、善男子等よ曠野とは生死なり、熱と渴とは煩惱の熱の爲に渴けるなり、道路とは菩薩善知識なり、自ら飲むとは善巧なり。

(寶雨經)

【五五】菩薩は衆生の所作を知り、其因縁を知り、其の心行を知り、其樂欲を知りて法を説くものなり、貪欲多き者には不淨を説き瞋恚多き者には大慈を説き、愚痴多き者には勤めて一切法を觀察せんことを教へ、三毒共に多き者には勝知の法門を

成就せしめ、生死を樂む者には三苦を説き、若し諸有に著せば空寂を説き、懈怠も
のには大精進を説き、我慢を懷く者には平等を説き、諂曲多き者には菩薩心を説き
心質直にして寂靜を樂む者には廣く爲めに成就せしむ。(華嚴經)

【五六】佛は弟子に告げ給はく、金師が一種の金を以て意に隨ひて種々の瓔珞を造
るが如し、鎖環釵、鐺矢冠等の形差別ありと雖も、然も金を離るゝものにあらず、
如來も亦爾り、一の佛道を以て衆生に隨ひ種々に分別して之を説く、譬へば一の識
を分別して六と説くが如く、一の色を分別して六と説くが如きは衆生を化せんが爲
の分別なり。(涅槃經)

【五七】人若し一心に心を誠にして佛に歸依すれば彼人は必大なる快樂を得べし、
佛の心は晝となく夜となく衆生を憶へばなり。人若し一心に心を誠にして達磨に歸
依すれば彼人は大なる快樂を得べし、達磨の力は晝となく夜となく衆生を加持れば
なり。人若し一心に心を誠にして僧伽に歸依すれば彼人は大なる安穩を得べし、僧

伽の威は晝となく夜となく衆生を保護ればなり。(帝釋所問經)

【五八】菩薩は能く三寶種を斷絶せざらしむ、何となれば諸の衆生は教化して菩
提心を發さしむるは是れ佛寶種を永續せしむるもの、衆生の爲に法藏を開闡くは是
れ法寶種を永續せしむるもの、教法を護持りて乘違ふことなきは僧寶種を永續せし
むるものなり、又能く一切の大願を稱讚するは佛寶種を永續せしむるもの、因縁の
門を分別演説するは法寶種を永續せしむるもの、勤めて六和敬の法を修習ふは僧寶
種を永續せしむるものなり、又衆生の田の中に佛種子を下すは佛寶種を永續せしむ
るもの、正法を護持りて身命を惜まざるは法寶種を永續せしむるもの、大衆を統理
めて疲ることなきは僧寶種を永續せしむるものなり。(華嚴經)

【五九】善男子よ一の佛寶中に無量の佛あるが如く、如來の説き給へる法寶も亦然
り、一の法寶中に無量の義あり、善男子よ法に四種あり、教法と理法と行法と果
法となり。法寶は能く一切生死の牢獄を破、猶金剛の能く萬物を壞るが如し、法

寶は能く痴闇の衆生を照す、猶日光の世界を照すが如し、法寶は能く衆生に喜樂を與ふ、猶天樂の諸天人を樂ますが如し、法寶は衆生をして彼岸に渡らしむ、猶堅牢大船の如し、法寶は四魔を破し無上菩提を證す、猶金剛の甲冑の如し、法寶は生死を割断ち繫縛を離れしむ、猶智慧の利劍の如し、法寶は衆生を運載せて火宅を出づ猶寶車の如し、法寶は三塗の黒闇を照破す、猶明燈の法し、法寶は善く衆生を誘うて寶所に達せしむ、猶險路の導師の如し、之を法寶不思議の恩と名く。(心地觀經)

(增一阿含經)

【六〇】 汝等身を正し意を正し結跏趺座して他の想なく専ら法を念せよ、正法は諸の欲愛を除き、塵勞を除き、渴愛の心は永く起らず欲をして無欲ならしめ、諸の煩惱の結縛と病とを離るゝなり、されば自ら法を念じ又人にも念せしめよ。

【六一】 我れ初め道を成じて誰か敬ふべく讚む可きかを觀るに法に過ぎたるは無し法は能く一切の凡聖を成立す。(般若經)

(增一阿含經)

【六二】 三寶の恩とは衆生を利樂すること不思議にして休息あることなきを云ふ、諸佛身は眞善無漏にして、無數大劫の間因を修めて證る所なれば、三有の業果永く盡きて餘すことなく、功德の寶山巍々として一切有情の知る能はざる所、福德甚深にして大海の如く、智慧無碍にして虚空に等しく、光明遍く十方三世を照して一切衆生煩惱業障都て覺知せず、苦海に沉淪みて生死窮まりなきも、三寶世に出て大船師となりて能く愛流を截ち彼岸に超昇らしむ。諸有智者悉く皆瞻仰ぎ奉る。

(心地觀經)

【六三】 佛言く、位次の上下を争なかれ、先に戒を受けしものを上となし、後に戒を受けしものを下となせ、座する時は前後上下の序を整へよ。(梵網經)

【六四】 佛此經を説き給へる時に一人の乞食ありて、座より起ち恭敬の心を表して佛に問ひ奉りて言く、世尊我は今深き坑に墮つることを欲せず、又佛と共に諍ふことを欲せざれども世尊我は昔しよりかく念へり、我阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲

するも家富まざるが故に能はざるべしと、而るに今菩薩の初心を讚め給ふに、貧富貴賤の別を説き給はず、世尊我は阿耨多羅三藐三菩提の心を起して自ら身を輕んぜざるべし。佛彼に告げ給はく、乞食の人よ汝の言誠に善し今より我に隨ふて無上道心を起せ、舍利弗いはく、希有なりかくの如く賤しき人と雖も上妙なる貴き法を成就す、何んぞ智なる人之れを輕賤せんと、佛舍利弗に告げ給はく、舍利弗よ他の人を輕んずるものは自らを傷ふものなり。(華手經)

【六五】 佛祇園精舍に在ませしとき、諸の弟子に告げ給はく、諸の弟子よ、豪貴の族種より出家せしものにして、自らは貴として他を賤しとなすものは眞人にあらず法を行すること如法にして、眞諦の法に趣向き自らを貴しとせず、他を賤しとせざるものは眞人なり、端正なるに依りて自ら貴として他を賤しとせば眞人にあらず、邪淫と怒りと癡とを斷ち自らを貴しとせざるものは眞人なり、才辨ありて談に工にして自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、王者の知る所の故に自ら貴

として他を賤しとせる者は眞人にあらず、經を讀み戒を持ち論を學べるが故に自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、糞衣を着して自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、初禪を得たるが故に自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、山林樹下に處するが故に自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、四禪已上の果を得たるが故に自ら貴として他を賤しとせるものは眞人にあらず、故に眞人にあざるものを捨て、眞人の法を取れ。(中阿含經)

【六六】 若し其れ法を求むる者は應に種姓を觀るべからず、上族の中に生ると雖も極惡の行ひを造作せば衆人皆呵責す、是則ち下賤と名く、種族は卑く微かなりと雖も内に實の道行あれば人の爲に尊奉せらる、是則ち尊貴と名く、德行充滿すれば云何ぞ禮敬せざらんや、心惡なれば形をして賤しからしむ、意善なれば身をして貴からしむ。(大莊嚴經論)

【六七】 佛王に告げ給はく、王よ我法に七種の廣施福田を説く、一には佛像僧房堂

閣を興立し、二には清凉なる樹園浴池を作り、三には常に醫藥を施して衆の病人を療救ひ、四には堅牢なる船を作りて人民を濟渡し、五には橋梁を作りて渡し、六には道の近くに井を作りて渴乏けるものに飲ましめ、七には道の近くに圜廁を作りて便利處を與ふべし。王大に歡喜し禮拜して、九十六種の道の中に於て佛道最も尊し、九十六種の法の中に於て佛法最も貴し、九十六種の僧の中に於て佛僧最も正なりと歎じぬ。(梵網經)

【六八】護世者よ八法を以て世を護るべし、一には言と行と相應して違ふなかれ、二には尊長を奉敬ひて輕んじ慢るなかれ、三には言辭を柔軟にして兪曠しくするなかれ、四には謙下恭順にして常に遜意を執れ、五には常に質朴にして諛諂ふなかれ、六には常に仁和を修めて佞飾るなかれ、七には一切の諸惡をなすなかれ、八には徳本を以て世間に隨ふべし。(寶積經)

【六九】仁を履み慈を行ひ博く愛して衆を濟はじ、十一の譽れありて福ひ常に身に

隨ふ、臥して安く、覺めて安く、惡夢を見ず、天護る、人愛す、毒せず、兵せず、水に喪はず、火に喪はず、所在利を得、死して梵天に昇る。(法句經)

【七〇】衆の離壞するを見れば能く和合せしめよ、人の善事を掲げ他の過咎を隱せ、人の慚耻づる處は終に宣說せられ、人の秘事を聞きては餘に向ふて説かざれ、世事の爲に而も呪誓を作さざれ少思己に加ふる者あらば大いに報ひんことを思欲せよ、己の怨みの者に於ては恒に善心を生ぜよ、怨親等々苦まじ先づ怨む者を救へ、罵る者あるを見れば反りて憐心を生ぜよ、來り打つ者を見れば悲心を生ぜよ、諸の衆生を視ること猶ほ父母の如くせよ。(優婆塞戒經)

【七一】看病の人は病人の定めて死すべきを知るとも死すべしと言ふ勿れ、當に教へて三寶に歸依せしめ佛法僧を念じて勤めて供養を修せしむべし、又病苦は皆是れ往世の不善の因縁を以て是の苦報を獲たるが故に今當に懺悔すべしと説け、病者聞き已りて若し瞋意惡口罵言を生ずとも黙して報へざる亦彼を捨棄てざれ。(善生經)

【七二】 世尊諸の比丘に告て言く、比丘よ疾病を人は一には食物を選択べ、二には時に隨て食へ、三には醫藥に親近め、四には愁と喜と瞋りとを懷ふなかれ、五には看病の人に向て從順なるべし。又看病の人は一には良藥を分別せよ、二には懈怠ることなく先に起き後に臥し勇猛みて懈怠るなかれ、三には睡眠を少くせよ、四には法を以て供養し飲食も貪る事なかれ、五には病人の爲めに法を説け、病める人と護れる人と共に之れに反する時は病癒ゆることを得ず。(増一阿含經)

【七三】 殺生せざる得は一切の寂法を得、一切の有情に常に安穩を與へ、常に慈悲を樂み瞋恨の心を起さず、此人は常に疾病なく、常に命長く臥しては安く、寢ては歡しく又悪しき夢を見ず、惡趣を畏れず。(海龍王經)

【七四】 我汝等に説かん、衆くの生けるものを殺せる罪に三あり。一には善き人を殺せる罪、二には佛の教に順ひて正しき道を行へる阿羅漢の位にある者を殺す罪、三には惡しき人と犬猫等の畜生を殺せる罪となり。又諸の弟子よ、貪りて生ける者

を殺し、瞋りて生けるものを殺し、癡にして生ける者を殺すは皆大なる罪なり。又諸の弟子よ、自ら生ける者を殺せば殺生の罪あり、諸の弟子よ、生ける者を殺すは慈悲なきの甚しきものなり。又諸の弟子よ、道を歩むとき知らずして蟻等を殺し醫を業となせるものが人の病を治さんとして計らずも命を終らしめ、父母が慈悲の心を以て子を戒めんとして打ち計らず命を終らしめ、燃る火の中に飛入り爲めに蟲の命を終らしむるが如きは、惡しき心のあるにあらざれば、殺生せる罪にはあらず。(正法念處經)

【七五】 一切の男子は是我父なり、一切の女人は我母なり、我生を受けざる處なし、故に六道の生類は皆之我父母たるなり、而るに之を殺して食へば即ち我父母を殺すに等しく、又我故身を殺すに等し、故に常に生物を故ちて生命を全せしめよ、若世の人畜生を殺すを見る時は應に方便を以て其苦難を救護せよ。(梵網經)

【七六】 若し我を殺さんと欲する者あらば我喜ばす、我喜ばざるが如く他も亦是の

如くならん云何ぞ、彼を殺さん。是覺を作し已りて不殺戒を受け殺生を樂まざれ。

(五苦章句經)

【七七】 離垢地に住する菩薩は自然に一切の殺生を離れ刀杖を捨て瞋恨の心なく慙あり愧あり、一切衆生に於て慈悲心を起し常に樂事を求む、此の如くにして衆生を惡むだにせず泥んや之を害するをや。(華嚴經)

【七八】 舍衛國に貧女あり難陀と稱す、孤獨にして食を乞ひて自ら活く、時に諸の國王、大臣、長者等の佛及衆僧に供養するを見て自ら思へらく、我何の罪ありてか斯る貧賤の家に生れ此福田に供養する能はざるやと、自ら咎を悔みつゝ一日の間施をば乞ひ僅かに一錢を得たり、難陀即ち油家に至り油を求む、油家問ふ、一錢の油は少量にして用ふるに足らず之を以て何を爲さんとするや、難陀具さに願ふ所を語りしかば油主之を愍み油を倍して與ふ、難陀大に喜び持ちて祇園精舍に詣り、世尊に奉りて自ら願ふて曰く、我今此小燈を以て佛に供養し奉る、願くば此功德を以て

來世に明かなる智慧を得、以て一切衆生の闇を除滅するを得んと、此誓を作し了り佛を禮して去れり。

中夜を過ぎて後諸の燈明悉く滅したるも、唯此燈のみ獨り消えず、目犍連三度之を消さんとせしも遂に消へず、佛之を見て曰はく、目犍連よ彼の女人大菩提心を以て供へたるが故に、四大海水を以て之を消すも永く消ゆることなかるべしと。

(賢愚經)

【七九】 若し慳心多き者は復泥土と雖金玉よりも重んず、若し悲心多き者は金玉を施すと雖草木よりも輕んず、若し慳心多き者は財寶を喪失うて心大に憂へ惱む、若し施をなす者は受くる者をして喜悅ばじめ自ら亦喜悅ぶ、設ひ美食ありとも若し施し與へずして食すれば以て美食と爲さず、設ひ惡食ありとも布施を行することを得て然る後に食すれば、心中歡悅びを以て極めて美なりと爲す、若し施をなし竟りて餘りあれば自ら食ふ善丈夫は心に喜樂を生ずる事涅槃を得るが如し、信心なき者

は誰か是語を信せん、信なき者は設ひ麤食あらんに饑ゑたる者ありて前に立つも尙施し與ふこと能はず、況んや餘の勝妙なる物を能く人に與へんや。若し人大水の邊りに於て尙ほ少水すら衆生に施し與ふこと能はず況んや餘の好財をや、是人世間の糞土の水よりも得易きものなるをも慳みて人の是を乞ふを聞くすら猶ほ悋惜を懷く況んや復餘の好財をや、如し二人あり一は即ち大いに富み、一は則ち貧窮なり、今乞者ありて來らんには是の如き二人俱に苦惱を懷く、財物ある者は其求索め恐れ、財物なき者は我當に云何してか少財物を得て是に與ふべきと是の如き二人憂苦同じと雖も果報各異なれり、貪ふして悲念ある者は天人の中に生れて無量の富樂を受け、慳貪なる者は餓鬼の中に生れて無量の苦を受くべし。(大丈夫論)

【八〇】 悲心をもつて一人に施す功德は大なること地の如し、己の爲に一切に施すは報ひを得ること芥子の如し、一の厄難の人を救ふは餘の一切に施すに勝れり、衆星光りありと雖一の明月に如かず。(大丈夫論)

【八一】 佛王舍城内の妙徳長者、勇猛長者、善法長者等に告げて言く、長者よ我今妙義を説きて未來世の恩徳を知らざるものを利益せん、世間出世間の恩に四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩なり、是の四恩なり、是の四恩は一切衆生平等に荷負へり。(心地觀經)

【八二】 爾時世尊諸の比丘に告げたまはく、若し衆生ありて反復することを知らば此人敬ふべし、小恩すら尙ほ忘れず何況んや大恩をや、設ひ此間を離るゝこと百千由旬なるも我に近づけると異らずして我常に歎譽す、若し衆生ありて反復すること知らざれば大恩すら尙ほ憶はず、何況んや小恩をや設ひ彼れ我に近づくとも我れ彼に近づかず、正使ひ僧衣を被て吾左右にあるも此人猶遠ざかるが如し。

(增一阿含經)

【八三】 恩を知る者は當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、恩を報ずる者も亦當に一切衆生を教えて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし。(大方便佛報恩經)

【八四】 若し問ふ者ありて誰か是れ恩を知て能く恩に報ゆる者なりやと言はゞ、應に正しく答へて言ふべし、佛は是れ恩を知て能く恩に報ゆる者なりと、何を以ての故に一切世間恩を知て恩に報ゆるは佛に過ぎたる者なきが故に。(般若經)

【八五】 恩を知る者は大悲の本なり、善業を開くの初門なり、人に愛敬せられて名譽遠く聞え死して天に生ずることを得て終に佛道を成せん、恩を知らざる者は畜生よりも甚し。(智度論)

【八六】 地神の云ふことを聞かずや我大地を負ふ、一切の所有ゆるもの及須彌山の、重きをも厭はず、然れども三種の人に於て我恒に厭ふ心あり、一には叛逆の心を懷て人王を謀害せんとするもの、二には親の恩を棄て父母に孝ならざるもの、三には因果を撥無し三尊を毀謗り、法輪の僧を破り善を修むるものを障ふるものなり、是の如き人は一念の間も此を任持つを欲せざるなり。(華嚴經)

【八七】 大樹緊那羅王の夫人等は佛に白して言く、世尊我等は無上道心を發せり、

如何にして大道を成就することを得べきかを教へ給へ、佛彼の夫人等に告げ給はく夫人等よ三界に於て最も勝れたる菩提心を發し、能く煩惱を除けば即ち疾に菩提を成就せん。次に夫人等よ一には佛に親近き、二には邪見を離れよ必ず菩提を成就せん、次に一には身戒、二には口戒、三には意戒、戒を持てば必ず菩提を成就せん。次に一には無爲の心を以て布施し、二には詐偽を以てせず戒を修持ち、三には恭敬の心を以て賢聖に趣向ふ、四には正しき法を聴くものは菩提を成就せん。又次に一には食を食らさず、二には飲物を食らさず、三には丈夫を食らさず、四には裝飾品を食らさず、五には遊觀を食らさず、六には戲笑を食らさず、七には歌音樂の伎樂も食らさず、八には舞戲及び交會酒樂等を食らざるものは菩提成就せん。次に一には我見を説かず、二には衆生見を説かず、三には壽命見を説かず、四には人見を説かず、五には斷無の見を説かず、六には常有の見を説かず、七には有の見に執着せず、八には無の見に執着せず、九には善く因縁の法を解するものは菩提を成就せん。次に一には諸の

衆生を慈み、二には他の財を貪愛らず、三には他人の男子を思念はず、四には假令命を失ふことあるも妄語せず、五には兩舌を爲さず、六には兪惡の語を爲さず、七には綺語を爲さず、八には無明煩惱を起さず、九には瞋恚を起さず、十には愚痴を起さざるものは菩提を成就せん。次に女人は五蘊の法を觀察するに左の如くなれ、色蘊を觀すること水の沫の如く、酒と色とを貪らざれ、受蘊を觀すること泡の如く樂受を貪らず苦受を捨離せず、不苦不樂受に於て癡痴を生さざれ、想蘊を觀すること焰の如く、男女の差別の想を起さざれ、行蘊を觀すること芭蕉の如く、諸行は賢實ならざることを知り、諸の法に住せず著せざれ、識蘊を觀すること幻の如く、心識を以て一切の法に染むなかれ、夫人等よかくの如く觀察し又行ふものは男身を得て疾に菩提を成就することを得るなり、是の時に大樹緊那羅王の夫人姪女等は、歡喜踊躍て佛を禮拜せり。(大樹緊那羅王所問經)

【八八】 阿那分邸長者は兒の爲めに婦を娶る。顔貌端正にして桃の華の色の如し、

婦は波斯匿王の大臣の女なるを以て、父を待み姑嬢及夫智を恭敬はず、亦三寶に事へざりければ、長者は佛の所に詣て教を垂れ給はんことを請へり、翌且佛は長者の家に入り給ひ新婦に告げて言く、新婦よ人の婦となるものに四事あり、一には母に似たる婦、二には親に似たる婦、三には敵に似たる婦、四には婢に似たる婦なり。母に似たる婦とは夫主に承事へ供養すること乏しからざるなり、親に似たる婦とは婦主を見るに増減の心なく苦樂を共にするなり、敵に似たる婦とは夫を見ては瞋恚を懷き夫主を憎嫉みて承事へざるなり、婢に似たる婦とは賢良の婦なり夫主を見ては言語を忍び終に還返さず恒に慈心あるなり、夫に事へて善き者は死して天上に生れ、悪しきものは地獄に生る、善生女は之れを聞きて大に慚て曰く、世尊妾は今より婢に似たる婦とならんと、遂に三寶に歸依して優婆夷となれり。

(阿那分邸化七子經)

【八九】 佛言く、女に五の力あり、一には色の力、二には親族の力、三には田業の

力、四には兒の力、五には自守の力なり、此五力を以て夫主を輕んじ慢る、然れども唯夫主の富み貴き一の力は能く女を蔽ふ。(増一阿含經)

【九〇】佛は祇園精舎に居ませしとき、給孤獨長者は子の爲に婦を娶りぬ、端正雙ひなかりしかば橋豪傲慢りて姑嬢夫主に承事へず、時に長者自ら思へらく、婦は橋慢なり何を以てか之に教へん、杖を以て捶つは善き法にあらず、恚にせしめて教ざれば其罪日々に増長す、唯佛に請うて教へ祈らんのみと。清且長者は佛を請じ奉りて教を請はんとせしに、新婦の玉邪女は出來らず、即ち佛大光明を放つて玉邪女の室を照し給ふ、玉邪女大に驚き怖れ直ちに出來る、佛玉邪女に告げ給はく、玉邪女よ女人の法は端正に倚りて橋慢を生ずるなかれ、形貌の端正は眞の端正にあらず唯心端正なれば人皆愛し敬ふ、是れ實の端正なり、女人は一には晚く眠り早く起きて家事を修治め、美膳あれば先づ姑嬢夫主に進め、二には家物を看護り、三には口を慎み忍耐にして瞋ること少く、四には誠め慎みて恒に及ばさんことは恐れ、五に

は一心に姑嬢夫主を恭ひ孝を盡すべし。又五種の婦法あり、一には母の如き婦あり夫を愛すること子の如きが故に、二には臣の如き婦あり、夫に事ふること君に事ふる臣の如くなるが故に、三には妹の如き婦あり、夫に事ふること兄に事ふるが如きが故に、四には婢の如き婦あり、夫に事ふること婢の如きが故に、五には夫の如き婦あり、親睦じくして心を同くし、形唯異なるのみ橋慢の情なく、善く内外に事へ家豊に盈ち賓客を待ち善名を稱揚ぐ。次に三の惡法あり、一には未だ冥からざるに眠り日出で、起きず、夫主に對して瞋り反日して嫌ひ且つ罵り、二には好飲は自ら嗜ひ、惡食を姑嬢夫主に與へ、色を好み欺詐く、三には生活を念はずして遊び、他人の好醜長短を道ひ、鬪亂ひ口舌り、親族を憎嫉むの如きは、人の爲めに賤しめらる。玉邪女は佛の教を受け心に慚愧ちて曰く、吾愚癡にして正法を知らざりし爲めに爲すこと皆邪なりき、希くば之れを許し給へと、即ち佛に歸して三歸五戒を受く。(玉邪經)

【九一】 婦の夫に事ふるに五事あり、一には夫外より來らば當に起て之を迎ふべし、二には夫出で、在らざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし、三には心を外夫に婬することを得ず罵罵らるゝも還へし、罵りて色を作すことを得ず、四には當に夫の教誠を用ふべし、所有の什物は藏匿することを得ず、五には夫休息せば善く藏して乃ち臥すことを得。(六方禮經)

【九二】 世間の人民、父子、兄弟、夫婦、家室、中外の親屬當に相敬愛して相憎み嫉むことなく、有無相通じて貪惜を得ること無く、言と色と常に和して相違戻ることなかるべし。(無量壽經)

【九三】 夫の婦を視るに五事あり、一には出入當に婦を敬ふべし、二には之に飲食せしめ時節を以て衣被を與ふべし、三には當に金銀珠璣を給ふべし、四には家中の所有の多少は悉く用て之に付すべし、五には外に於て邪まに傳御を畜ふことを得ず。(六方禮經)

(六方禮經)

【九四】 能く信を守ること有れば、室内安和し、福自然に至る、神の授與るに非ざるなり。(阿難分別經)

【九五】 國王の恩とは、國王たる者は福德最も勝れ、人間に生ると雖も自在を得るが故に三十三天の諸の天子等恒に其力を與えて護持るが故に、其境界に於る山河大地は大海の際を盡くして國王に屬し、その福德一切衆生の福に勝過るゝが故に、是れ大聖王は正しき法を以て化め能く衆生をして悉皆安樂ならしむ。譬へば世間の一切の堂殿には柱を根本とするが如く、人民の豊樂は王を根本と爲す王の有なればなり國王若し正しき法を以て治めざるときは、人民は依る所なし若し正しき法を以て治むるときは、他の國より侵逼むるもの、自界の中より叛逆するもの、惡しき鬼疾病飢饉不時の雨風等の恐るべきものは國に入らざるなり、國王は群民を見ること子の如く晝夜擁護の心を捨つることなし、擁護の恩や大なりといふべきなり。國王に十徳あり、一には能照と名く、智慧の眼を以て世間を照すが故に、二には莊嚴と名く

大福智を以て國を莊嚴るが故に、三には與樂と名く、大安樂を人民に與ふるが故に、四には伏怨と名く、一切の怨敵を伏するが故に、五には離怖と名く、能く難を卻け、恐怖を離るが故に、六には任賢と名く、諸の賢人を集めて國事を任すが故に、七には法本と名く、人民國土に安く住むが故に、八には持世と名く、法を以て世間を持つが故に、九には業主と名く、諸の業は國王に屬するが故に、十には人主と名く、一切の人民は王を主となすが故なり。一切の國王は先世の福を以て是の如きの十種の勝徳を成就せり、若し人民ありて能く善心を行ひ、仁王を敬まひ輔け尊重むこと佛の如くすれば、是人現世に安穩豊樂にして願求むる所あれば心に稱はざることなし、聖王の恩徳廣大なること是の如し、人ありて國王の恩を知らざる時は苦を受るなり。(心地觀經)

【九六】 王は父母の如くにて愛念差ふこと無し、國人は子の如くにて忠孝を並び懷く。(佛爲勝光天子說王法經)

【九七】 人は王を以て命と爲し、王は政法を以て身と爲す、世道既に和平なれば佛法茲より始まる。(華嚴經)

【九八】 賢王あり、鶏の鳴く時より起て先づ道場に入り、賢聖を敬禮し福祐を祈り祖宗を祠祭り恩徳を報せんことを思ひ、人に孝敬を教へ萬方を冥益す、了りて後には朝に臨みて諸の大臣と王事を理め事を聴く、此二事了りて後膳を進む、次に沐浴し園林に遊ぶ、日の没せんとする頃より王殿に論座を敷き、國內の大智惠ある沙門婆羅門を請ひ、正法を演說せしめて之を聴き、何ものか善、何ものか惡、何ものか正、何ものか邪、何ごとか行ふべき、何ごとか止むべきを諮問ひ給ふ。又時には宿舊の智臣高德にして隠たるものを集めて國政を詢問き、其得失を評せしめらる。此の如く爲給ふが故に、自ら省み誠め給ひ、王徳増長し、威は強隣を伏し、群臣は嚴肅に内外心を一にせり。(華嚴經)

【九九】 大夫の奴客婢使を視るに五事あり、一には當に時を以て飯食せしめ衣被を

與ふべし、二には病瘦には當に醫を呼びて治せしむべし、三には妄りに之を搦捶つことを得ず、四には私の財物あれば之を奪ふことを得ず、五には分付の物は當に平等ならしむべし。奴客婢使の大夫に事ふるにも亦五事あり、一には當に早起して大夫に呼ばしむること勿るべし、二には當に作すべき所は自から心を用ひて之を爲すべし、三には當に大夫の物を愛指すべし、四には大夫の出入には當に之を送迎ふべし、五には當に大夫の善を稱揚むべし、其の惡を説くことを得ず。(六方禮經)

【一〇〇】善の極は孝より大なるは無く、惡の極は不孝なり。(忍辱經)

【一〇一】慈父、慈母、長養の恩によりて一切男女皆安樂なり、慈父の恩高きこと山王の如く、慈母の恩深きこと大海の如し。(心地觀經)

【一〇二】地より珍寶を積みて上二十八天に至り悉く以て人に施すとも父母に供養するに如かず。(末羅末經)

【一〇三】世に若し佛なくんば善く父母に事へよ、父母に事ふるは即ち是れ佛に事

欠

欠

【一八三】 四種の危険より汝の財産を保護すべし、四種の危険とは、一には他の國王、二には盜賊、三には火難、四には水難なり。(梵文增一阿含經)

【一八四】 佛曰はく、財を求むるに六の非道あり、一には博戲を爲して財貨を求むるは非道なり、二には時に非ずして財貨を求むるは非道なり、三には酒を飲み放逸にして財貨を求むるは非道なり、四には悪友に親しみて財貨を求むるは非道なり、五には伎樂を喜ばん爲に財貨を求むるは非道なり、六には懶惰にして財貨を求むるは非道なり。

(二) 若し人博戲を爲すときは六の災あり、負くれば怨を生じ、失へば恥を生じ、負くれば安眠する能はず、怨まれたる人に喜び笑はれ、宗親をして憂を懐かしめ、衆人の中にて説を立つるも人信用せず。又人博戲を爲せば、家事を營まず、家事を營まざれば功業成らず、未だ得ざる財貨を得る能はず、本所有せる財貨は忽ち消耗すべし。

(二) 若人時に非ずして財貨を求め投機の事を爲すときは六の災あり、自ら身を護らず、財貨を護らず、妻子を護らず、人の爲に疑はれ、苦み患多く、人の爲に謗らる。又投機の事を爲せば、家事を営まず、家事を営まざれば功業成らず、未だ得ざる財貨は得る能はず、本所有せる財貨は忽ち消耗すべし。

(三) 若人酒を飲み放逸なれば、六の災あり、現に財貨を失ひ、疾病多く鬪諍を増加し、秘密發露し、名譽を損し、智慧滅して愚痴生ず。又飲酒放逸なるものは、家事を営まず、家事を営まざれば功業成らず、未だ得ざる財貨は得る能はず、本有せる財貨は消耗すべし。

(四) 若人悪友に親むときは六の災あり、盜賊と親しみ、詐欺と近づき、醉狂と親しみ、放恣と近づき會ふ毎に嬉戯れ、此等の者と親友となり伴侶となる。又悪友に親めば家事を営まず、家事を営まざれば功業ならず、未だ得ざる財貨は得る能はず、本有せる財貨は消耗すべし。

(五) 若人妓樂を喜ぶときは六の災あり、歌に耽り、舞に耽り、住て樂を作し、鈴を耽り弄び、拍手を事とし遊宴を喜ばん。又妓樂に耽るものは家事を営まず、家事を営まざれば功業成らず、未だ得ざる財貨は得る能はず、本有せし財貨は忽ち消耗すべし。

(六) 若懶惰なれば六の災あり、早起時業を作さず、晩き時業を作さず、寒き時業を作さず、暑き時業を作さず、飽ける時業を作さず、飢ゆる時業を作さず。又懶惰の人は家事を営まず、家事を営まざれば功業成らず、未だ得ざる財貨は得る能はず、本所有せる財貨は忽ち消耗すべし。(中阿含經)

【二八五】 飲酒は衆生を惱ます爲の故に罪因となる、若し人酒を飲むときは則ち不善の門を開きて以て、能く定及び諸の善法を害ふこと衆果を植ゑて牆障を作らざるが如しく(成實論)

【二八六】 酒は不善諸惡の根本なり、若し能く是を除斷せば、則ち衆の罪を遠ざ

く。(涅槃經)

【一八七】 其れ酒を飲む者は六種の失あり、一には財を失ふ、二には病を生ず、三には闘ひ争ふ、四には悪名流布す、五には恚怒暴かに生ず、六には智慧日に損す。

(長阿含經)

【一八八】 佛言く、酒に多失あり放逸の門を開く、飲むこと葶藶子の如きも罪を犯すこと已に積む、若し病苦を消すに用ふるは先の斷する所にあらず。(舍利弗門經)

【一八九】 若し自ら酒器を手にして人に與へ以て酒を飲ましむる者は五百世の中に手なからん、何況んや自ら飲むをや一切の人に飲むことを教へ及び一切の衆生に酒を飲ましむることを得ず、況んや自ら酒を飲むをや。(梵網經)

【一九〇】 佛言く、人世間に於て喜んで酒を飲みて酔へば三十六失を得何等か三十六失なるや、一には人酒を飲んで酔へば子として父を敬はず、臣として君を敬はざらしめ、君臣父子上下あることなし。二には語言亂誤多し。三には酔へば便ち兩

舌多口す。四には自と人との伏匿隠私を道ふ。五には酔へば便ち天を罵り、社に尿して忌諱を壁す。六には酔へば便ち道中に臥して復歸ること能はず、或は所持の什物を亡ふ。七には酔へば便ち自ら正くすること能はず。八には酔へば便ち低仰横行き或は溝坑に墮つ。九には酔へば便ち倒頓れて復起き身體を破傷す。十には賣買する所謬誤りて妄りに觸抵す。十一には酔へば便ち事を失ひ治生を憂へず。十二には所有の財物耗減す。十三には酔へば便ち妻子の飢寒を念はず。十四には酔へば便ち喚罵り王法を避けず。十五には酔へば便ち衣を解き褌袴を脱ぎ裸形にて走る。十六には酔へば便ち妄りに人の家中に入り、人の婦女を牽き語言干し亂れ其過ち無狀なり。十七には人其傍らを過れば與に共に闘はんと欲す。十八には地を踏んで喚呼し四隣を驚動す。十九には酔へば便ち妄りに蟲豸を殺す。二十には酔へば便ち舍中の什物を搥捶ちて之を破碎す。二十一には酔へば便ち家室を視ること罪囚の如く語言口を衝いて出づ。二十二には悪人を朋黨とす、二十三には賢善を疎遠にす。二十四

には酔臥して覺むる時は身體疾病の如し、二十五には酔へば便ち吐逆し若しくは惡露出で妻子すら其所狀を憎む。二十六には酔へば便ち意前蕩せんと欲し象狼も避くる所なし。二十七には酔へば便ち明經の賢者を敬はず道士を敬はず沙門を敬はず。二十八には酔へば便ち姪逸にして畏れ避くる所なし。二十九には酔へば便ち狂人の如し人之を見れば皆走る。三十には酔へば便ち死人の如く復識知る所なし。三十一には酔へば或は疱面を得、或は酒病を得正に萎みて黃熱す。三十二には天龍鬼神皆酒を以て惡となす。三十三には親厚の知識日に之を遠ざく。三十四には酔へば便ち蹲踞して長吏を視或は鞭にて打れ兩目を合す。三十五には壽盡くるの後當に太山地獄に入り常に鎖銅口に入り腹中を焦し過下し去るべし、是の如くして生を求むるも得難く死を求むるも得難きこと千萬歳なり。三十六には地獄中より出で來り生れて人と爲るも常に愚癡にして識知る所なし、今愚癡にして識知所なき人あるを見るに皆故世宿命より酒を好み嗜むの致す所なり。是の如く分明なれば亦酒を慎むべし。

(分別善惡所起經)

【一九一】 佛比丘に告げたまはく、歩行に五徳あり、何等か五とす、一には能く走る、二には力あり、三には睡りを除く、四には飲食消し易くして病を作さず、五には行者となれば定意を得易く、已に定意を得れば久しきを爲す。(七處三昧經)

【一九二】 世尊諸の比丘に告げたまはく、浴室を造作せば五の功德あり、云何か五と爲す、一には風を除く、二には病癒ゆることを得、三には塵垢を除き去る、四には身體輕便なり、五には肥白なることを得。(增一阿含經)

【一九三】 佛諸の弟子に告げて曰はく、諸の弟子よ、頭髮長きと、爪長きと、衣裳垢づきたると、時の宜しきを知らざると、多く論ずるとは比丘の五毀辱の法と名く。(僧祇律)

【一九四】 朝夕口を嗽げよ、口を嗽ぐに法あり、水を以て口に著け三度回轉すべし之を口を淨むるの法と名く。(十誦律)

【一九五】一切道俗七衆等水を用ふるには須らく、之を漉して飲用すべし、水を漉すには信すべきものをして漉さしめよ、信すべからずんば自ら之を漉せ、水を漉し己らば審に之を看能く、掌中の細文を見ることを得て、而して後之を用ゐよ。
(僧祇律)

【一九六】人食を爲すこと太だ過ぐる時は、身重くして懈怠を生じ、現世と未來世に於て大利を失はん、睡眠して自ら苦を受け又他人を惱まし、又迷ひ悶へて寝り難からん、故に時に應じて食物を籌量せよ。
(尼乾子經)

【一九七】廁を作るには東に設くるを得ず、必ず北に設くべし、而して風道を南と西と東に開けよ、便に往くものは嘿して廁に入るを得ず、應に彈指して然る後入れ若内に人あらば逆に彈指して應すべし。
(僧祇律)

【一九八】人病を得るに十因縁あり、一には久しく坐して臥せず、二には食貸すことなし、三には憂愁、四には疲極、五には淫洗、六には瞋恚、七には大便を忍ぶ、

八には小便を忍ぶ、九には上風を制す、十には下風を制す。
(醫經)

【一九九】衆生あり病を得て醫藥を服せず、病を看る人なき爲に死するを横死といふ、次に王法の爲に殺さるゝを横死といふ、次に遊獵放逸姪事飲酒等に耽けりて、度なく爲に害せらるゝを横死といふ、次に水の爲に溺さるゝを横死といふ、次に火の爲に焼かるゝを横死といふ、次に獅子、虎、豹等の惡獸の中に入りて害せらるゝを横死といふ、次に飢渴に困じて死するを横死といふ、次に厭禱毒藥等に害せらるゝを横死といふ、次に巖に投じて死するを横死といふ。
(藥師如來本願經)

【二〇〇】人身は四大の和合によりて成す、四大とは地水火風なり、一大調はざれば、百一の病を生ず、四大共に調はざれば、四百四病、同時に俱に生ず。
(五王經)

【二〇一】病人に九法成就することあれば、必ず常に横死すべし、一には益の無き食と知れども貪り食す、二には籌量を知らず、三には肉食未だ消せざるに食す、四には食未だ調せざるに嘔吐き出す、五には已に消して出すべきを強て持つ、六には

食病に隨はず、七には病に隨ひて食すれども量を籌らず、八には要心を懈怠る、九には智慧なきこと是なり。(僧祇律)

【二〇二】 佛言く、人は常に目の爲に欺れ、耳の爲に欺れ、鼻の爲に欺れ、口の爲に欺れ、身の爲に欺る。(阿含正行經)

【二〇三】 昔佛在世の時一の道人あり、河邊の樹下にありて道を學べり、十二年の間貪想除かず、意を走らせ意を散じて、但六欲を念ふ、即ち目には色、耳には聲、鼻には香、口には味、身には觸、想には法を得んと思念して、身動き意遊び、曾て寧んじ息むことなかりき。時に佛彼の道人の度すべきを知り、往いて其所に至り、共に樹下に宿り給ふ、須臾にして龜あり、河中より出で來りて、樹下に至る復一の水狗あり、飢ゑて食を求め、龜と相逢ひ、便ち龜を噉はんと欲す、龜其頭尾及び、其の四脚を縮めて、甲の中に藏す噉ふことを得る能はず、水狗少しく遠ければ、復頭足を出して行歩すること故の如し、水狗奈何ともすること能はず、龜遂に脱る、

ことを得たり。是に於て道人佛に問ふ、此龜護命の鎧あり、水狗其便りを得ること能はずと。佛答へて曰く、吾念ふに世人此龜に如かず、無常を知らずして六情を放恣にし、外魔便りを得形壞れ神去りて、生死端なく五道に輪轉し、苦惱百千なり、是皆意の造る所にあらざることなし、宜しく自ら勉め勵みて、滅度の安きを求むべし。是に於て佛即ち偈を説きて曰く、

六を藏すること龜の如く、意を防ぐこと城の如くせよ、慧と魔と戰ひて勝てば則ち患なし。(法句經)

【二〇四】 五根は心を其主と爲す、是の故に汝等當に好く心を制すべし、心の畏るべきことは毒蛇、惡獸、盜賊、大火よりも甚し。(遺教經)

【二〇五】 佛沙門に告げて給はく、慎みて汝が意を信すること勿かれ、意は終に信すべからず。(四十二章經)

【二〇六】 此の身の動作は皆心に由りて起る、故に應に先づ心を調ふべし、身を苦

しむこと莫れ、身は木石の如く知るところなし、何が故に心に隨ひて體を苦むるや。

(佛本行經)

【二〇七】心の師と作るを願ひて、心を師とせざれ。(涅槃經)

【二〇八】百の寺を作るは、一人を活すに如かず、十方天下の人を活すは意を守る

こと一日なるに如かず。(罵意經)

【二〇九】心相は是れ大患の本なり、是の心をして自在なることを得せしめざれ。

(寶雲經)

【二一〇】寧ろ自ら骨を被り心を破るとも、終に心に隨ひて、惡を作さざれ但力士

のみを多力と爲さず、能く自ら心を端くするは力士に勝れり、佛は心と諍ひしより

己來、其劫無數なり、敢て心に隨はず、勤力精進て自ら佛となれるなり。(涅槃經)

【二一一】遊心の士は後に悔ひざることなし、心を恣にする禍は須彌よりも

重し。(忍辱經)

【二一二】一心に意を制し、身を端くし、行を正くして、獨り諸善を作し、衆惡を

爲さざれば、身獨り度脱して其福德を獲ん。(無量壽經)

【二一三】佛言く、汝等比丘よ諂曲の心は道と相違す、是故に宜しく其の心を質

直すべし、當に知るべし、諂曲は但欺訛なることを入道の人は則ち此處なし、是

故に汝等宜しく心を端くして質直を以て本と爲すべし。(遺教經)

【二一四】心惟は本淨し諸過を垢と爲す、智慧の水を以て心垢を洗除せよ。

(文珠師利門經)

【二一五】喩へば軍征の若し、百萬の衆名將を恃みて以て敵を叩く、道人心を伏

し、意を制し、法を修め、道を奉じ、戒禁に順行ひ、身意清白して恩を布き、徳を

施し、忿怒、憍奢、諍訟を除き棄て、專精に道を行ふは、名將の衆を師ゆるが若し。

(自浸經)

【二一六】宜しく自ら決斷して身を端くし、行ひを正くし、益諸善を作して己れを

修め、體を深くし心垢を洗除し、言行を忠信にして表裏相應じ能く自ら度し、轉相拯濟して精明に求願ひて善本を積累ぬべし。(無量壽經)

【二二七】衆人の中に坐して衆人に羞ぢず、人の敬ふ所と爲るは、心淨端なるが故なり。(正行經)

【二二八】汝が目を端くせよ、汝が耳を端くせよ、汝が鼻を端くせよ、汝が口を端くせよ、汝が身を端くせよ、汝が意を端くせよ。(正行經)

【二二九】人、鐵を鍛ひ滓を去りて器と成せば、器即ち精し。好く道を學ぶ人心の垢染を去れば、行即ち清淨なり。(四十二章經)

【二三〇】人、漸を以て安徐に精進して心垢を洗除すること工匠の金を鍊ふが如くせよ、惡は心より生じて還りて自ら身を壞る鐵の垢を生じて反りて其形を蝕ふが如し。(法句經)

佛 陀 の 福 音 (終)

昭和十三年十月二十日 印刷
昭和十三年十月三十日 發行

(定價金壹圓也)

不 許 複 製

著 者 小 林 善 八

發行者 東京市中野區小瀧町四九番地 市 川 靖 己

印刷者 東京市中野區小瀧町四九番地 東京出版通信社印刷部

發 賣 所

東京市中野區小瀧町四九番地
東 京 出 版 通 信 社
電話中野六七〇四番・振替東京八四八三八番

終

